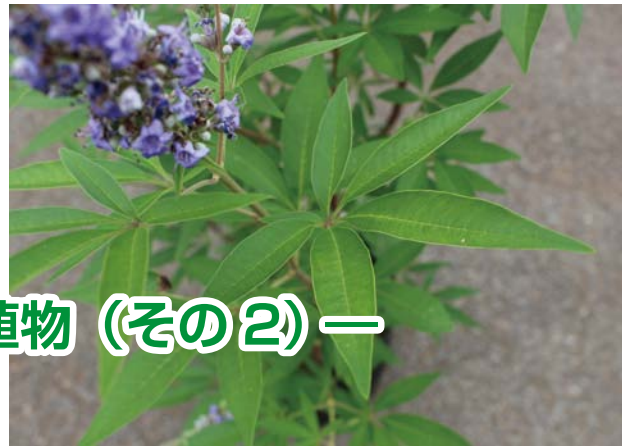


▲樹里安だより

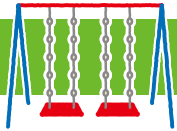
ジュリアン

2017年
Vol.37



— 植木屋さんのおすすめ植物 (その2) — セイヨウニンジンボク

シソ科(クマツヅラ科)の落葉低木で、原産は地中海から中央アジアといわれている。成長は比較的早く、5～7枚の小さな小葉が合わさって手のひら状になっている。花期は6月下旬～8月頃。春先に伸びた枝の先に紫がかかった青い花を穂状に咲かせ、花物が少ない夏のお庭に爽やかな彩りを与えてくれる。枝の広がり比较大的大きいため空間を確保する必要があるが、伸び伸びと枝を伸ばしてあげると、花いっぱい姿を楽しむことができる。



動植物観察の教育の場に活用

豊かな環境整えた川口自然公園

見沼たんぼの一角に、自然と親しむことができる施設があるのをご存じか。

川口市差間沼内の「川口自然公園」がそれだ。周囲の景観と調和を保ちながら自然保護や動植物の生態観察ができる教育の場として活用していくのを目的としている。

公園は、同市が湿地などの原野を買収し昭和56年度から造成工事に着手、昭和63年度に完成し平成元年4月に開園した。総面積32,542㎡。うち修景池3,500㎡と水路でつながり、歩道橋が巡らされた湿生植物園2,980㎡、それに広い樹林帯と散策路19,750㎡が設けられている。

自然保全とともに憩いの場として利用してもらうため、すべり台、鉄棒などを組み合わせた大型複合遊具のほか、平均台、シーソーなどを備えた遊具広場と自由広場9,800㎡がある。

このほか45台収容できる駐車場、身体の不自由な人も利用できるトイレ、水飲み場も完備されている。

この公園は、自然を重視しているだけに園内全域に数多くの生き物が見られる。管理している同市公園緑地公社が平成24年から平成28年にかけて調査した結果、そのことが確認された。

修景池には、ギンブナなどのフナ属やモツゴ、タイリクバラタナゴ、それに絶滅危惧種のメダカなど多数種が見つげられた。池は釣り人に解放されているので、終日、太公望が糸を垂らしているが、水質の悪化を防ぐため春から秋にかけて水草のホテイアオイを入れて水質浄化を図っている。ホテイアオイは暑い季節に美しい淡紫色の花を咲かせ、修景池にふさわしく水面を飾っている。

ヨシ、チガヤ、ハンゲショウなど200種を超える植物が繁茂する湿生植物園にもヌマエビ、ヤゴ、タニシなど底生動物が多く生息、樹林帯には高木、低木、草類が生い茂り、その中にはセミ、チョウ、コガネムシ、コオロギ、トンボ、クモ類が住みついでいて、まさに自然そのもの。

とくに都市部では余り見られなくなってきたチョウの保護に力を入れるため、平成6年には樹林帯の一郭に「蝶類保護管理区」が設置された。幼虫の食べる植物を植栽したり、立看板などでPRしたりする保護活動のかいあって、同公社の調査で、アゲハ、シジミ、シロチョウなどチョウの仲間と、スズメガ、ヤガなどガの仲間がいずれも30数種ずつ確認され、マニアをよ



ろこばせている。

この公園は、見沼たんぼや見沼用水の流れなど昔ながらのたたずまいに囲まれているうえ、公園自体が動植物を守る環境を整えており、自然が失われつつある都会の中では貴重な存在となっている。

公園情報

- 1 開園年月日 平成元年4月1日
- 2 所在地 川口市大字差間字沼内1355
- 3 面積 32,542㎡
- 4 植栽数量 高木48種 621本
中木14種 125本
低木16種 5,232.4㎡
- 5 公園の種別 地区公園



芝生広場

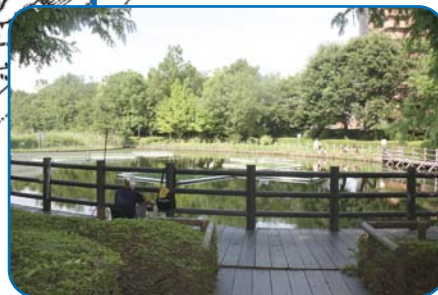


湿生植物園



遊具広場

修景池





生ゴムの生産を支える

アマゾン流域原産のパラゴムノキ

ゴムといえば、消しゴム、ゴムひも、防水布など身近な生活用具にたくさん使われているが、この原料となるのがゴムノキから採取する樹液（生ゴムの原料ラテックス）である。

ゴム質を生ずるゴム植物は、全世界で400種以上も知られているが、弾性ゴムを産出するのは南アメリカ・アマゾン川流域原産のトウダイグサ科の常緑高木パラゴムノキ（別名ヘベア樹）が代表的な木である。

はじめは、原住民が樹皮から取れる乳液を集め、球状に固めてまりを作って遊具にしていたが、18世紀後半になってヨーロッパへ伝えられた。コロンブスのアメリカ大陸発見がきっかけでヨーロッパに持ち込まれ、1770年代にイギリスで消しゴムが発案されたのを機に輪ゴムなどに利用方法が拡大された。

これに伴って原料不足となり、原木の栽培の必要性が叫ばれた。このため、1876年にあるイギリス人が門外不出とされていたパラゴムノキの種子を秘密裏に持ち出し、原生地と気候がよく似ているマレー半島で栽培に乗り出したのだと、伝えられている。その後、シンガポール、オーストラリアなどでも栽培が行われたが、経済的な変動や病害虫に遭い失敗に終わり、現在では全世界の産額95%以上がマレーシア、インドネシア諸島の農園栽培によって支えられているという。

栽培木は、苗を植えてから樹液（ラテックス）を採取するま



(ゴムノキ)

では5～6年、樹高17～20メートルになってからで、以後20～30年は採取できる。その後は量が減り経済的に採取できなくなるので、新たに木を更新しなくてはならない。

弾性ゴムの利用が、タイヤチューブ、電気絶縁物、ホース、履き物、おもちゃなどのほか、耐薬品性、耐熱性の製品の開発にまで広まったのにつれて、原料確保のため石油化学で合成された合成ゴムが大量に生産されるようになり、1962年には天然ゴム生産量と並び、それ以降は合成ゴム生産量の方が上回っている。



第二次世界大戦が起きた時、ゴム資源を生ずる東南アジアの産地が戦火で消滅したため、欧米諸国ではパラゴムノキ以外の新しいゴム植物の開発に努めた。1931年には中央アジア原産のゴムタンポポ、そのあとマレーシア原産のゲタペルカノキなどに目をつけ栽培したが、いずれも樹液の採取に手数がかかりすぎたり、質が悪すぎたりして、余り使われなかった。戦後、パラゴムノキの栽培農園は復活し、生産量は減少したものの原料の生産を続けている。

ちなみに、観葉植物として普及しているゴムノキ（別名インドゴムノキ）、三つ編みのスタンダード仕立てで人気を集めたベンジャミンゴムは、いずれもインド、ミャンマーなど東南アジア原産のクワ科の常緑樹。ゴムの原料となる樹液の採取には適さない。





記念樹にふさわしい木とそのいわれ

出版記念

コブシ

(モクレン科モクレン属)
(落葉広葉樹・高木・陽樹)



つぼみの形がこぶしに似ていることから、“つかむ”につながる。ここでは、出版された本が読者の心をつかむようにと願って植える。また、コブシの花が長く厳しい冬の終わりに明るく咲き出すことから、長い苦勞の末、出版に至った記念にふさわしいといえよう。

1. 特徴

開花期3月、結実期9～10月。生長は早い。大きくなならないシデコブシなどもある。

2. 植えるときの注意

時期 11～12月・2～3月

場所 日なたで適湿の肥沃な土を好む。

3. 管理のポイント

自然に樹形が整うので、せん定はあまりしない。

参考：日本緑化センター 木を植えよう 記念樹にふさわしい木とそのいわれ



川口緑化センターの主なイベント開催結果報告

1 第14回駒込・安行植木まつり

平成28年4月29日（金/祝）～30日（土）

新旧の植木の里、駒込と安行の交流及び緑化の普及啓発を目的として、今年も駒込駅前の染井吉野桜記念公園において、表題の事業を開催いたしました。会期中は安行特産の花植木の展示・販売を始め、園芸デモンストレーションや無料鉢花配布等を実施し、来場者には大変好評でした。



2 職長・安全衛生責任者教育講習会

平成28年6月4日（土）～5日（日）

安全衛生知識の向上及び労働災害の防止を目的として、労働安全衛生法に基づく、職長・安全衛生責任者教育講習会を2日間の日程で開催いたしました。当日は建設業に従事される方を中心に参加され、知識の普及が図られました。



3 常緑樹の剪定講習会

平成28年6月18日（土）

安行の伝統技術の紹介、継承を目的とした、技能・伝承習得研修会の一環として、プロの植木職人が一般参加者を対象に常緑樹の剪定技術を教える、表題の講習会を今年も開催いたしました。

参加者には資料を中心とした講義と実際にサザンカを剪定する実技を通じて知識と技術をしっかりと学んでいただきました。



4 川口緑化センター・道の駅「川口・あんぎょう」開館20周年記念事業

平成28年10月8日（土）～10日（月/祝）

川口緑化センター・道の駅「川口・あんぎょう」が平成8年4月に開館して、今年で20周年を迎えたことを機に、「第82回秋の安行花植木まつり」開催に合わせ記念事業を開催いたしました。

記念事業として、川口大盆栽展、生け花展及び親子生け花体験教室、枝物展示、見本庭園展示、無料お茶席などを行いました。





神話・伝説の花と植物

(その5)

花にまつわる神話・伝説は、目に見えない超自然的な霊物への畏敬の念から生まれたものである。神々は非常に人間的で喜怒哀楽を持っているというが、人間がおよびもつかない力と美しさがある。その神々への親しみとあこがれは美しい花や植物と重ね合わされ、語りつがれてきた。

バラはビーナスの涙の花

ビーナスが幼い息子のキューピッドと遊んでいるとき、キューピッドの射た矢が誤ってビーナスの胸に刺さった。この矢は当たると恋愛に夢中になるという不思議な力をもっていたので、その力の通りビーナスはアドニスという美少年に熱愛するようになった。ところがアドニスは猟に出てイノシシの牙に突かれて死んでしまった。流れ出たアドニスの血にビーナスの悲嘆の涙がまざり、そこから真紅のバラが咲いたのだという。

名僧が見つけた芳香のジンチョウゲ

漢名は「^{すいこう}瑞香」。昔、中国である名僧が山に入って谷川に沿って歩くうち疲れがでたので、岩にもたれて休んだ。そのうちに僧がうとうとしていると、どこからともなくよい香りが漂ってきた。辺りを見まわすと岩陰に灌木が生えていて、その花からよい香りが漂っていた。僧は珍しい木だ^{すいとう}と持ち帰って育てた。村民たちは、めでたい印だとして「瑞香」と名付けて普及させたという。

雪を赤く染めた血から生まれたクロッカス

西欧の伝説によると、ギリシャ神話の神ヘルメスにクローカスという許婚がいた。ある晴れた日、二人は雪すべりに出かけ、そりに乗って楽しんだ。帰る時がきて、ヘルメスはクローカスをそりに乗せ次に自分が乗ろうとした時、一陣の風が吹いてきて、そりはクローカスを乗せたまま谷間へ落ちた。谷間の雪に刺さったそりには白雪を朱に染めたクローカスの悲しい姿があった。翌年、この谷間に春が訪れるとクローカスが血を流した辺りに美しい花が咲き出した。そして、その花は彼女の名にちなんで「クローカス」と呼ばれるようになった。

オリーブの枝とハトは平和の象徴

旧約聖書の「創世記」に記されている「ノアの箱船から放たれたハトがオリーブの若葉をくわえて戻ってきた。このことで神の怒りがとけて洪水が治まり、地上に住めるようになった」の故事により、ギリシャ時代以降、平和の象徴として広まった。国連の旗などオリーブを平和のシンボルに用いたものも多い。



ジュリアン

樹里安

川口緑化センター・道の駅「川口・あんぎょう」

発行日：平成29年3月15日

発行：公益財団法人 川口緑化センター

〒334-0058 川口市安行領家 844-2

TEL.048-296-4021

ホームページ：http://www.jurian.or.jp/